

平成24年度未来の京都創造研究事業 研究だより

第 2 号

本事業は、大学の若手研究者等と京都市の担当部署が協力しあって調査・研究を進めることで、京都市の政策や事業に生かすことのできる、より実践的な研究成果の獲得を目指して昨年度から公益財団法人 大学コンソーシアム京都が京都市と共同で行っている事業です。

前回の第 1 号では今年度を実施する 6 件の調査・研究テーマの概要をお知らせしましたが、今回の第 2 号では指定課題「地蔵盆などの地域の伝統行事の現状と地域コミュニティ活性化への影響」に取り組んでおられる 2 件の調査・研究について、各研究代表者からその内容を報告していただきます。

「四地域を通して考える地蔵盆 ～世代間の伝承構造と地域コミュニティでの機能～」

京都精華大学人文学部教授：真下 美弥子

立地条件・構成人員・運営形態が異なる 4 町内（上京区武者小路町、東山区西之町、中京区今新在家西町、左京区東大路高野第三住宅）の地蔵盆を対象に現地調査を行い、各町の行事の機能や有効性を明らかにするとともに、地蔵盆の継続・復活の意義や方法を検討します。また、地蔵盆と関わりの深い伝統行事である盆踊りについても、あわせて調査します。

研究代表者のプロフィール

東京生まれですが、中高生の頃から京の町を歩いてきました。子育て期に居住した東大路高野第三住宅では子ども会役員として地蔵盆の企画運営に参加。『京のオバケ 四季の暮しとまじないの文化』（2004 年、文春新書）執筆時には武者小路町と西之町の地蔵盆調査もおこないました。

調査・研究の状況

8 月 5 日の中京区朱雀第一小学校の夏祭りの調査を皮切りに、予定どおり 8 月末までに 4 町内の地蔵盆を調査することができました。地蔵盆は一般に、お盆終了後の土日に集中して営まれる場合が多いのですが、今年は 18・19 と 25・26 の両土日に分散したため、各町内のご協力を得て、全日程について動画および静止画撮影し、画像データを得ることができました。その間には各行事や町内についてさまざまな御教示もいただきました。

今回調査した武者小路町、今新在家西町、西之町の 3 町はいずれも江戸時代またはそれ以前からの歴史ある町であり、それぞれ江戸時代以来の由緒をもつ古い地蔵が祀られています。調査を通じて実感したのは、町内の人々がどれほど「お地蔵さん」を大事にし、その祭礼である地蔵盆を通じて町内のつきあいを大事にしてこられたかということです。京の町々の地蔵は、知られているように、その地域限定の境界性をもって、疫病や厄災の侵入を防ぎ、延命息災を保障する存在として信仰されてきました。西之町の年配男性はこれを「助かりたい・

すがりたい時の、守り神のような存在」と表現されます。地蔵盆はこのような信仰とその背後にある町内の結束を確認し、これを次世代の子どもへも伝える場として機能してきたのです。

古い三つの町内は地蔵盆を維持するために並々ならぬ努力を重ねてきました。3 町で共通して実施していることは「外孫」への参加呼びかけです。住宅地である武者小路町ではこれによって実際の居住数の 2 倍以上の幼児・児童の参加を得て往年のかたちを維持しています。商業地である西之町と今新在家町では、子ども行事を残しながらも中高齢者の親睦の場としての性格を打ち出しています。しかし今後の継続の見通しはわからないとのこと。



今新在家西町のお地藏様

今後の抱負

西之町では昭和 30 年代の青年会の記録が残されており、当時の地蔵盆行事の詳細をたどることができます。これを土台にして、聴き取りで隙間を補いながら、行事の変遷とそれらの有効性について考察します。また高野第三住宅では子ども数が往時の 600 名から 40 名に減少しながらも各世代が参加する夏祭りを継続しており、こちらも 30 年間の運営をたどる手だてがあるため、集合住宅における地蔵盆開催のひとつのモデルとしてその経緯を整理します。

「地蔵盆の運営実態と地域のレジリエンス向上に果たす役割に関する研究」

京都大学大学院工学研究科・研究員：前田 昌弘

京都ではこれまで町内および元学区を基礎として住民のコミュニティが形成され、地域自治の文化が醸成されてきました。しかし近年、特に街中では住民の高齢化やマンション開発に伴う新規住民の増加が進行し、コミュニティの維持が難しくなっているといわれます。それは町内会加入率の低下やマンションと地域の関係の希薄化といった問題となって表れています。

そこで本研究では、京都において地域の人々の手によって運営されてきた行事である地蔵盆に着目し、地蔵盆の運営を通じたコミュニティ形成の実態をまず明らかにし、次に、人口変動や開発行為といった地域を取り巻く変化や不確実性へのコミュニティの対応力（レジリエンスと言います）の醸成に地蔵盆が果たす役割について考察します。この目的が達成されれば、本研究は地蔵盆の再評価とコミュニティに対する支援施策を検討する上での第一歩になると考えられます。

研究代表者のプロフィール

有隣学区で2010年、2011年に開催された“地蔵めぐり”イベントに関わった際に地蔵盆とまちづくりの関係に関心を持ち、研究を開始しました。本事業をきっかけとして調査対象を他の学区にも広げ、また、まちづくりやコミュニティ政策との関連性についてより深く考えたいです。共著「京都市都心部における地蔵盆の役割に関する研究」（日本建築学会学術講演会梗概集，2011年）。

町内会長への地蔵盆の管理、地蔵盆の運営、町内会の運営などに関するアンケート調査を行いました。8月中旬から下旬には地蔵盆を開催する全64町内を研究室の学生等と手分けして訪れ、行事の内容、開催場所、参加者の人数と構成などの調査も行いました。

調査・研究の状況

7月上旬から、地蔵盆について特色ある取り組みを行っている三つの元学区（上京区待賢学区、中京区城巽学区、下京区有隣学区）を対象として、各学区の自治連合会、まちづくり委員会などのご協力を得て、全93町内の



町内の地蔵盆（有隣学区・上鱗形町） 元学区の地蔵盆（城巽学区）

今後の抱負

現在調査結果を取りまとめているのですが、当面の見通しとして、以下の2点を検証したいと考えています。
①地蔵盆には、行事の内容や場所、体制等を住民や地域の事情に応じて選択できるという「手軽さ」と、昔から続いてきた行事であり簡単にはやめるわけにいかないという「重さ」という一見相反する二つの性質が併存しており、このことが運営を持続させている。
②地蔵盆は各町内で開催されてきたが、近年は元学区を単位とする地蔵盆も取り組まれている。その目的には少なくとも、(a)マンションや地蔵盆が無い町内の住民の受け入れといった町内地蔵盆の機能の補完・代替、(b)町内間の協調の促進および地区計画の策定など、元学区としての意思決定機能の創発がある。特に(b)は、地蔵盆には本来無い機能が地蔵盆を介した関係によって生み出されている点が興味深いです。

編集後記

研究代表者・協力者らは8月の残暑厳しい中、熱心に現地調査されていました（事務局も参加）。「実りの秋」となるでしょう。次号は自由課題2テーマについて報告する予定です。

ご意見やご感想がありましたら、以下の問い合わせ先まで、お気軽にお寄せください。

公益財団法人 大学コンソーシアム京都 高等教育研究推進事業部 シンクタンク事業
担当：水田（みづた）、鳴海（なるみ） E-mail：mirainokyoto@consortium.or.jp
Tel：075-708-5803 Fax：075-353-9101